



Monthly Report

ニッセイ基礎研究所 経済産業調査部門

2000年8月号

<目次>

今月の視点：「アリとキリギリス」

チーフエコノミスト 樋 浩一 p1

トピックス「若者の失業率はなぜ高いのか」

研究員：斎藤 太郎 p3

<今月の視点>

「アリとキリギリス」

チーフエコノミスト 樋 浩一（はじ こういち）

E-mail:haji@nli-research.co.jp Tel: (03) 3597-8471

蟻（あり）とキリギリスの話を知らない人はいないだろう。蟻はせっせと働いて冬の準備をしていたが、キリギリスは歌を歌って遊んでばかりいたので冬になって餓死してしまったという話だ。もっとも、ビートたけし（北野武）のギャグでは、蟻は過労で死んでしまい、キリギリスはアリの蓄えで幸せに暮らしたとさ、ということになるようだが…。

企業が生産を拡大しようとするれば、新しい工場や設備が必要だ。生産したものを人々が消費に使ってしまわないで、より多くを貯蓄して設備の増加に回せばより高い経済成長が可能になる。日本の家計貯蓄率は世界でも高く、第二次大戦後は豊富な貯蓄を国内の投資に回して高い経済成長を実現してきた。しかし、第一次石油危機を契機に経済成長率が低下すると国内の投資が減少し、豊富な貯蓄は対外黒字となってむしろ世界から批判される元になった。過剰になった貯蓄を低金利と規制緩和で国内の投資に有効に使えば、再び高成長が可能になる。これが1980年代後半のバブル期を支えた経済政策の基本的なアイデアだったのではないだろうか。

しかしこれがうまくいくのは、大量の投資で作った設備で生産したものを誰かが買ってこれればという前提での話だ。バブル期には設備投資の需要のために設備が必要となるという高度成長期並みの加速度原理が働いて、十分需要があるように見えた。最後には生産設備はたくさんできたが、これで作ったものを買う人がいなくて消費が不足するという問題がおきてしまった。これが過剰設備問題の正体である。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものでもありません。(Copyright ニッセイ基礎研究所 禁転載)

消費は飽和したのか？

設備をいくら作っても最後はそれで作ったものを消費者が買ってくれなくては経済は長期には安定しない。日本経済が安定成長するためには消費拡大が必要だと訴えると、すかさず「消費は飽和している」という反論が飛んでくる。日頃金欠病に悩む私にとって、欲しいものがないというのは驚くべきことだ。

どうしてこういう議論が出てくるのか、いくつか原因が考えられる。第一は、「買いたいモノがない」という言い方にあるように、消費の中身を「モノ」を買うことに求めるからだ。耐久消費財の普及は進み、日本の住宅の狭さを考えるとモノを買ってももう置けないという主張は一理あるが、消費するものはモノとは限らない。第二は、忙しくてお金を使うヒマが無いというものだ。心配ご無用。お子さんやご家族があなたの代わりにいくらでもお金を使ってくれるだろう。最後にもっとも大きな原因は、今の所得と老後に備えた貯蓄を前提にもの考えるからではないだろうか。確かに今の所得を前提にすれば無理をしてでも買いたいものはないかもしれないが、いくらでもお金を使って良いといわれれば欲しいモノはいくらでもあるだろう。自分の老後の生活資金や寝たきり・介護などの心配がなければ、お金を使いたいことも山ほどあるのではないか。

何のための経済成長か？

欧米諸国に追いつくことが課題だった時代には、現在の消費生活を犠牲にしても明日の豊かさを求めることには意義があった。アリとキリギリスの話は寒い冬ではないが、豊かな明日を目指す日本経済にとってピッタリの寓話だったに違いない。しかし過剰設備が一向に解消しない現在の日本経済には、毒のある北野武版がむしろ適切かも知れない。生活の豊かさは消費によって実現される。経済がいくら拡大しても消費が増えなくては生活は豊かにならない。しかし日本の経済政策はいつのまにか、本来の目的である生活の豊かさ＝消費の拡大ではなく、その前段にある経済の拡大だけが目標となってしまった。

日本経済が本格的に回復しないのは、不振の原因が一時的な設備投資の落ち込みにあるのではなく、高齢化社会に備えた貯蓄が経済のバランスを崩すほど大きすぎるからだ。日本経済を安定成長経路に復帰させるためには、勤儉貯蓄で生産を拡大するという発想から、貯蓄を効率化して消費を拡大させる方向へと経済政策の発想を移し替える必要があるだろう。バブル期以降せっかく貯えた貯蓄の多くは、実は不良債権や国債などの借金に化けてしまっている。過労で死んでしまわないまでも、寒い冬になって気がついてみたら貯め込んだはずの貯蓄が無かったというのでは、せっかく我慢して貯蓄した甲斐もない。現在の消費をエンジョイしながらいかに効率的に冬に備えるか、発想の転換が求められている。

ちなみに「アリとキリギリス」の話はイソップだとずっと思っていたが、調べてみるとイソップでは、キリギリスではなくセミとか甲虫だったらしい。思いこみは恐ろしい。